

# ZOCALO 2025 4 ▶ 6

ZOCALO=ソカロはメキシコの都市の広場を意味するスペイン語。埼玉県立近代美術館はアートを通して交流する市民の広場をめざしています。



令和6年度 公募展 課題作品③ 宮島達男  
《Number of Time in Coin-Locker》1996年  
発光ダイオード、IC、電線、プラスチック



令和6年度 公募展 総合グランプリ受賞作品  
櫻井博仁さん『時をきぎむアイスクリーム』



アーティスト・ユニットL.PACKにより  
食べ物として創作された『時をきぎむアイスクリーム』

## 【主な記事】

### 令和6年度 公募展 報告

「第2回 みつめて、かんじて、たべてみて！ —作品のみかた・味わいかた」

MOMASコレクション関連特集「アメリカ移民と美術」

MUSEUM NEWS 2025.4 ▶ 2025.6

ミュージアムショップおすすめ商品

コレクションノート「倉田弟次郎《久伊豆神社》より」

企画展「メキシコへのまなざし」関連コラム

「ソテーノとマンハーレス ふたつの《生命の樹》」

## 令和6年度 公募展 報告

# 第2回 みつめて、かんじて、たべてみて！ —作品のみかた・味わいかた

令和6年度 公募展「第2回 みつめて、かんじて、たべてみて！ —作品のみかた・味わいかた」は、昨年度に引き続き、「美術作品を鑑賞して、食として表現する」という観点で作品の募集を行いました。当館の収蔵作品である課題作品4点(① 因藤壽《こんばんは》1951年、② ジャン・アルプ《バラを食べるもの》1963年、③ 宮島達男《Number of Time in Coin-Locker》1996年、④ フィリップ・スタルク《ラ・マリー》製品化:1998年)から1点を鑑賞して、わきあがった「食」のイメージ(食感、味や匂いなど)を、感性を働かせて自由な発想で表現するものです。今年度は、県内の小学校、中学校、高等学校、特別支援学校の児童生徒から、217点の応募がありました。厳正な審査の結果、10作品が受賞作品に選ばれました。おめでとうございます。たくさんのご応募をいただき、誠にありがとうございました。

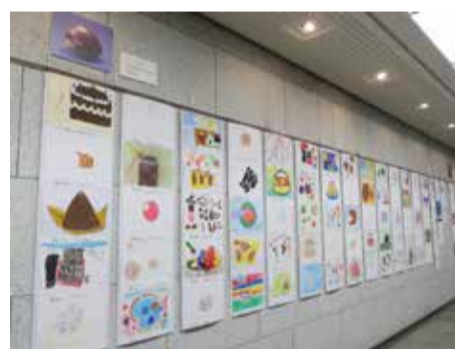
そして、審査員を務めていただいたアーティスト・ユニットL.PACK、の小田桐奨氏と中嶋哲矢氏により、総合グランプリ(審査員特別賞)に選ばれた櫻井博仁さんの『時をきぎむアイスクリーム』が食べ物として創作され、「想像が現実になる！」試食イベントを11月10日に実施しました。櫻井さんは宮島達男の課題作品③を鑑賞し、県民150人によってそれぞれ異なる速度で設定された150個のデジタル・カウンターが数字を刻み続ける様子に着目しました。そこから「個人によって時間の流れがちがうように時間を意識した食にしよう」と考え、様々なアイスクリームの溶けるスピードの違い、味や食感の違いがあらわれる『時をきぎむアイスクリーム』を発想しています。L.PACKのお二人は、約1か月の準備期間をかけて、櫻井さんの作品の色合いや形をアイスクリームとして見事に表現し、数字はチョコレートで再現しました。色鮮やかなアイスクリームは、キウイ、マンゴーなど、色々な味が混ざり合い、大人も子供も楽しめる美味しさに仕上がっていました。

この公募展は、来年度も課題作品を変えて、同じテーマで開催予定です。美術作品の印象は、言葉でうまく伝えられなくても、自分が感じたり考えたりしたことは様々な方法で、自由に表わすことができるのです

美術館で作品を鑑賞するときに、知識や準備は特に必要ありません。美術は「わからない」「難しそう」と感じている人も、ぜひこの公募展をきっかけとして、埼玉県立近代美術館を訪れてみませんか。美術館の作品を、五感を使って素直に感じてみましょう。美術家が生み出した本物の作品の力や美しさは、直接あなたに語り掛けてきます。本物の美術作品とあなたの心との距離は、実はとても近いのです。(O.A.)



審査員のアーティスト・ユニットL.PACK、の2人と  
建品館長、総合グランプリを受賞した櫻井博仁さん



全応募作品を館内に展示(10月29日~1月13日)

## 【無垢な精神を護るために】

埼玉県立近代美術館では様々な教育普及事業を展開していますが、とりわけ、県内の児童生徒を対象に2013年から実施してきた公募展は、独自のアイデアを盛り込んだ事業と言えます。概ね5年ごとにテーマを改めながら取り組んでおり、昨年度から「みつめて、かんじて、たべてみて！ —作品のみかた・味わいかた」と題した公募展を開催しています。課題に掲げた収蔵作品を鑑賞し、作品から得た印象やインスピレーションを自由に食べ物として表す/描くというものです。審査を経て総合グランプリに選ばれた作品は、小田桐奨氏と中嶋哲矢氏によるアーティスト・ユニットL.PACK、によって実際の食べ物として創作され、各受賞者やそのご家族が集う試食会において、みんなでその作品を味わいます。

この公募展では、課題作品を美術史的な情報と知識から鑑賞することや、食べ物の絵を上手に描くことはあまり優先していません。むしろ、美術作品を素のままに受けとめながら、見るという視覚的な経験を、味覚や嗅覚、食感といった異なる次元の生の感覚へと自在に置換していくプロセスを重視しています。こういった身体の諸感覚を横断していくプロセスを経ることによって、子供たちの感性的な世界がより自由に開かれたものになると考えているからです。

今日ではスマートフォンやネットからの情報が溢れ、ややもすれば子供たちの無垢な精神は、情報や知識に統制されかねない社会状況に陥っています。この公募展は、その精神を護っていくための、ささやかだが実験的な教育普及事業の試みと言えるかも知れません。(H.I.)

## アメリカ移民と美術

MOMASコレクション「アメリカの美術家たち」の出品作家から

国際化が進んだ現在、多くの美術家が国境を越えて活躍しています。特に移民大国でもあるアメリカでは、今日に至るまで多様なバックグラウンドを持つ美術家が集まり、交流やネットワークを築くことによって革新的な美術が生み出されています。MOMASコレクション「アメリカの美術家たち」では、新天地を求めてアメリカに渡った美術家の活動や、アメリカを故郷とする美術家とその社会や風土に向けた視線にも注目しながら、20世紀のアメリカにおける美術の動向をコレクションから紹介します。

当館は、戦前にアメリカとフランスで活動した岩槻出身の洋画家・田中保の作品と資料を多数収蔵しています。田中は1904年に単身シアトルに渡り、農家の手伝いやピーナッツ売りなどの仕事を転々としながら絵画の勉強を始めました。オランダ人画家フォック・タダマの画塾で学び、未来派やキュビズムといった当時の最先端の美術にも関心を寄せた田中は、支援者や理解者も得て個展を開催するなど、次第に画家としての地位を築いていきました[図1]。しかし、こうした活躍の一方でアジア系移民を排斥する風潮を背景に、1920年、さらなる新天地を求めてフランスへと旅立ちます。

日本国内の経済状況の悪化を背景にアメリカへの移民がピークに達した明治後期、故郷を離れ太平洋を渡った日本人の中には、田中と同様にアメリカで美術を学び才能を開花させる者も少なくありませんでした。岡山県に生まれ、1906年に渡米した国吉康雄は生涯のほとんどをニューヨークに生き、アメリカを代表する画家となった日系人です。恐慌や戦争など激動の時代、時に苦しい立場に置かれながらも、国吉は生活風景を主題にした作品や幻想的な風景画、憂鬱を帯びた女性像などによって評価を確立しました。また、国吉は教育者としての仕事や、社会における美術や美術家の役割に関与し、社会活動家としての側面も知られています。日本とアメリカの緊張関係が強まりやがて戦争に突入する1930年代から40年代にかけても、作家の権利を擁護する団体「アン・アメリカン・グループ」の会長を務めた(1939-1944年)ほか、作品や声明、組織的な活動を通して民主主義、反軍国主義の立場を表明しました。

1930年代以降ヨーロッパではナチスの台頭によって、ユダヤ人に対する迫害や前衛芸術への弾圧が強まってきました。1939年に第二次世界大戦が勃発すると、緊迫する状況を逃れてマルク・シャガール(滞米期間:1941-1948年、以下同じ)、ロベルト・マッタ(1939-1948年)、イヴ・タンギー(1939-1955年)、キス

リング(1941-1946年)[図2]など多くの美術家がヨーロッパからアメリカへと亡命・移住しました。戦争を背景にニューヨークへと渡った美術家の動向は現地の美術家にも刺激を与え、この地で新たな美術の潮流が生まれる原動力となりました。大戦後、世界の美術の中心地はパリからニューヨークへと移行していきます。

1950年代に入ると日本からも多くの美術家が海を渡り、同時代の新しい美術の動きに刺激を受けながら自身の芸術表現を探究しました。1963年に渡米した杉浦邦恵は、シカゴ・アート・インスティテュートで写真を学んだのちニューヨークにスタジオを構え、現在もニューヨークを拠点に活動を続けています。1980年代から杉浦は被写体を直接感光させるフォトグラムの手法を用いた作品制作に取り組みました。ウナギやカエル、猫など小動物をモチーフにしたシリーズは、独特の調色による微妙な色合いの印象画紙に小さな生命体の動きの痕跡がとどめられ、浮遊感のあるイメージが生み出されています[図3]。また、杉浦は作家活動と並行して、『美術手帖』誌上にニューヨークのアートニュースを約20年間寄稿しました(1986-2008年)。展覧会のレビューやインタビューなど400本以上に及んだ連載からは、自身が暮らすニューヨークにおける現在進行形の見つめる作家の明快で理知的なまなざしがうかがえます。「自分の体を会場に運び、作品を体験する肉体作業」\*でもあった批評の仕事を通して深められた美術家やアートシーンそのものへの関心は、1990年代終わりから制作された、美術家や科学者の等身大の影をそれぞれの人物と関連するモチーフやアクションとともにうつしとるポートレートのシリーズにも重なっていきました。

展示ではほかにも、ポップ・アートの流れに位置するジム・ダインやアンディ・ウォーホル、知覚や認識のメカニズムに対する問い直しを図るコンセプチュアルな表現を追究した荒川修作など、様々な角度からアメリカの美術を取り上げます。美術の新たな可能性を追い求め、実験的な表現の模索を続けた美術家たちの作品をお楽しみください。(S.H.)

\* 杉浦邦恵『ニューヨーク・アート、ニューヨーク・アーティスト』美術出版社、2013年、10頁



【図1】田中保《キュビズムの裸婦》1915年頃  
油彩、ボード



【図2】キスリング《赤いテーブルの上の果実》1944年  
油彩、カンヴァス



【図3】杉浦邦恵《Eel(post)》1996年  
ゼラチン・シルバー・プリントに調色